

笑われても卵を抱き続ける猫になりたい

2020年5月

眞鍋由比



『カモメに飛ぶことを教えた猫』 ルイス・セプルベダ 著
白水Uブックス 2005

今年4月17日、チリ出身の作家ルイス・セプルベダさん(70)がスペインで亡くなりました。コロナウィルス肺炎でした。イタリア語でも人気を博したこの『カモメに飛ぶことを教えた猫』は映画にもなっているし、昨年の劇団四季のミュージカルにもなっています。

セプルベダはチリに生まれて反独裁の活動で2年あまり投獄された後、ラテンアメリカ諸国を放浪し、ドイツのハンブルクに住むようになりました。だから船乗りの猫がでてくるし、主人公の猫ゾルバはハンブルクの港町に

住んでいるんですね。

ある日、人間が海に流した油に突っ込んで飛べなくなったカモメに出会います。死にそうなカモメの最後の3つの頼み。ゾルバは決して愛想のいい猫ではありませんが、約束は守ります。自分の産んだ卵を食べないで。温めて育てて。そして飛び方を教えて。

そしてゾルバは真面目に卵を抱き続け、中身がだいじょうぶか、お日さまにかざしてみたりしながら守ります。やがて卵の殻をやぶってでてきたヒナを見て、黒猫なのに茶色になるほど感動します。

でも何を食べさせたらいい? キャットフードもジャガイモも気に入らなさそう。そうだ、虫だ。なんとかつかまえて食べさせます。自分のことをママ、ママとなつてくるヒナが可愛くてしょうがない。でも飛ぶことを教えるのは・・・

もちろん友だちに相談。博士とよばれる猫。いつも百科事典で調べものをして蘊蓄たれてる。(ちょっと昨日のEテレのカマキリ先生のようにです。図鑑は索引を見るのはイヤ。それぞれのページをパラパラ飛ばしながら思わぬ写真や記事に出会るのが楽しい。・・・でも急いでいるときは少し困ります)



ぼくはきみのママじゃないんだ。

かわいいヒナがネズミに食べられそうになる。ゾルバは赤く光る眼がいっぱいの暗闇のなか、ネズミのアジトにボスと交渉へ向かいます。それから船乗り猫の向かい風にオスカメスカきいて、幸運な者という意味のフォルトゥナータという名前をつけてもらいます。いろいろな友だちの力を借りて育児は成功するのですが、どうしても飛び方を教えられない。そしてゾルバは禁じ手を思いつくのでした・・・

「きみのおかげでぼくたちは自分とはちがっている者を認め、尊重し、愛することを知ったんだ。自分と似たものを認めたり愛することは簡単だけど違っているものの場合とはとても難しい。」そして人間に対する皮肉。人間がほかの動物に対する傲慢な仕打ち。セプルベダは環境保護団体グリーンピースの活動をしていたこともありました。

コロナウィルスのおかげで経済活動が減少し、中国の大気汚染やイタリアの運河の水が綺麗になっているそうです。もっと人間は謙虚になるべきかもしれませんね。地球に住まわせてもらっている動物の一員として。